魔不良冒険奇行　～怪傑！　超電磁砲編～

ヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔不良冒険奇行　～怪傑！　超電磁砲編～

【Ｎコード】
Ｎ０５９６Ｚ

【作者名】
ヒロ

【あらすじ】
「電撃！　学園都市編」の第２部になります。テーマは「とある科学の超電磁砲」ですが、話を考えているとなかなかどうして超電磁っぽくならないものです。

～あらすじ～

学園都市に迷い込んだ天然種超能力少年を名乗るにしてはあまりに

も肉体派の不良少年・伊吹圭介が学園都市制覇を目論見、財布片手にフードコートを闊歩する！
迸る胃液、唸る腹の音、消えゆく財布とその中身――。
ついに出るのか超能力！？

次の日・早朝　［5：00］　「1日、あんたたちのために体を張ってやる」

まさに奇跡である。
爆発炎上の食物連鎖で第一一学区工業倉庫は玩具箱をひっくり返したような大騒ぎになったのは不幸中の幸いだったといえる。
現場の警察はこの上ないほど混乱し、圭介はバイクとグローブを回収、すたこらと逃げることができた。
おかげで徹夜でガラクタ同然のバイクを押す羽目になったのだが、残せば証拠になる。なにより思い出の品だ。無碍に扱うわけにもいかなかった。
すり傷切り傷は全身に及ぶものの五体満足で切り抜けられたのだ。あれだけの危機に瀕しておきながら。
まさに奇跡である。
それを象徴するかのような、清々しい朝焼けだ。
あの闇は晴れて小鳥はさえずり、周囲は傍の小川のせせらぎすら聞こえるほど物静か。パトランとはまったく無縁で――徹夜明けの圭介の横顔に、冷えたそよ風が鞭を打った。
「はぁ……」
奇跡だなんだと並び立てたが、さすがの圭介も体力の底を見せてきた。
72時間程度は働ける自信があったのだが。極限的な連続タイマンと逃走の緊迫3連コンボは伊達ではない。
ずるずるずるずる。
ずるずるずるずる。
爽やかな朝にバイクを引きずり圭介はひとり歩いていく。
警察と鉢合わせするのがイヤであの手この手で迂回を敢行したのだが、道行く先にはATMもコンビニもない。人気はなく（逃げている身としてはありがたいのだが）、また車両の通りもない。
いい加減休みたい――狼狽した圭介がまたため息をつく。その先

で。
人影を見つけた。ふたり。身なりや背格好は似ていないふたりだ。向かい合っていて、口論という様子でもない。例えるなら道を聞いている風だ。さすがにあれは警察とは無関係だろう。
ついでに俺も道を聞こうか――急ごうにもバイクを引きずっている手前、なかなか歩調は早まらない。もどかしさと疲労感で苛立ちは強まっていく。
ふいに、向かい合っていたふたりが離れた。ひとりは奥に、ひとりは――傍のフェンスに手をかけた。
フェンスの向こうは小川だ。
この時期の川の水温が水浴びに適するかどうかは昨日体感した圭介でも判断に迷うところであるが、そもそもフェンスを越えてまで服を着たまま水場に入ろうとするのはおかしい。
怪訝に思いながらも圭介はフェンスに近付いていく。茶髪の少年が、どこか虚ろな目でフェンスを上りきり――
「おっと」
――ろうとしたところ、圭介に足首を掴まれた。
茶髪少年は無表情だ。いっそこのままジーパン脱がしてもバレないような――と圭介は頭の隅で考える。
少年は圭介に逆らってフェンスを乗り越えようと無言で足を上げようと力を込める。圭介は嘆息して、
「でりゃ」
特別力を加えず、しかし全身の瞬発力を利用して、一発、フェンスから少年を引っこ抜いた。
抜いた手前、抱きかかえてもよかったのだが――力負けした上に優しく抱かれたらプライドも傷付くだろう――珍しく相手のことを考えて、あえて宙空に投げっぱなした。
圭介の傍に少年は落下した。
うつ伏せに。
顔面から。

アスファルトに。
傍から見て、かなり危険な落ち方である。受け身くらい取るものと思っていたが。
「っ痛ェな！　痛ェよ！　痛いじゃねェかよ！」
「お、おう。悪い」
起き上がった少年の剣幕に、思わず圭介は身じろいだ。今までの無感情が嘘のようだ。
「てめぇ、この浜面仕上だと知っての狼藉か、ああっ！？」
「はまづら……？　あー、もしかしてそれあんたのこと？」
「がああああっ！　喧嘩売ってんのかてめぇ！　売ってんだよな！」
「やだよメンドくせー。あんた弱そうだし」
「んだとゴラァ！」
ドスの利いた声で浜面仕上は拳を振り上げた。
圭介は肩をすくめ――しかしなんだかんだで拳を固めるあたり、この男も好きものである。
浜面仕上がお返しとばかりに左から顔面を狙った。
体さばきは場慣れしているようで躊躇いこそないが――いかんせん精練されていない。隙も大きく読みやすい拳だ。上体を後ろに逸らし、余裕を持って圭介はこれを避けた。
続く浜面の二打目。これも顔面狙いの右。しかし先の左よりも踏み込みが深い。
圭介の上体は戻っていない。逸らすだけでは避けられない。
当たる。
「でぃりゃ」
気の抜けた掛け声とともに圭介は右腕を伸ばした。
それは強く殴りつけるつもりで大きく振りかぶっていた浜面の右よりも、遥かに素早く浜面の顔面を捉えた。
自分の深い踏み込みの勢いをモロに受け、浜面は軽く吹き飛んだ。
「こ……の……！」
「あーあ、鼻ピアスなんかしてっから無駄に痛いだろ。……ま、そ

っちは吹き飛ばなかったみたいでなにより」
涙を溜めて顔を押さえ、浜面は圭介を睨みつけた。圭介が昨日相手取った“殺意”とはまた毛色が違う視線だ。
形容するなら、これは“卑屈”だろう。
「やれやれだぜ」
固めた拳をほどき、圭介は甚だ呆れてみせる。
思い切りの良さや反骨精神は評価できるが、酷く性格が歪んでいる。もっとも、それも昨日の相手には及ばないが。
それだけに残念だ。決意と誇りを持つようになれば、本気で殴るに値する男になれると思うのだが。
このまま流れで殴り倒しても、昨日以上の空虚で胸が満たされることは目に見えていた。
ただのチンピラをただ殴るのは、さすがにもう飽きている。
圭介は煮え切らない気分を吐きだそうと嘆息して――はたりと思いついた。
浜面は見たところ不良である。
不良とは――少なくとも圭介の常識では派手なものが好きだ。だからきっとバイクをいじくる。ならば圭介のバイクを直す算段も立てられるのではあるまいか――？
そう考えて、圭介は切り出した。
「あんたのヘッドはどこにいる？」
「はぁ？　お前なに言って」
「案内しろ。すぐに」
「ふっ、ふざけんなよ。んなこと」
「やらないなら……わかるよなぁ？　浜面くぅん？」
先ほど叩きつけた右拳を攻撃的にちらつかせ、浜面の反応を伺った。生唾を飲み込み目を見開く――怖じ気づいているのは間違いない。
後はこう言えばいいはずだ。圭介の経験的に。
「安心しろ。――悪いようにはしねーぜ」

悪いようにはしない――。
果たして不良にそんなことを言われて納得する人間がどれほどいるだろう。
しかしながら経験的に、圭介は百発百中であった。
単純な人となりが人を信じさせるのか、はたまた暴力が人の恐怖心をえぐるのか――それは、圭介自身の預かり知らぬところである。

＊　＊　＊

「廃ビルね。なかなかいいアジトだ。俺好み」
「そりゃどうも」
浜面はふてくされたように両手をジャージのポケットに隠して、圭介の2段先を登る。
先導されて行き着いたのは3階。だだっ広いフロアだった。隅には埃を被って雑多に物が陳列されており、さながら貧困街の露天商通りを思わせた。
その雑貨のひとつ――ソファーにもたれて、男達がじっと圭介を見つめていた。敵意が2割、好奇が残りといった視線だ。
一度、圭介は自身に目を向けなおした。
ボロボロのジャケットに切り傷や火傷だらけの全身。浜面も顔が腫れているが、どう見ても圭介の方が重傷である。
こんな人間に畏怖する不良もそういない。
「あんたらの誰が浜面のヘッドだ？」
「俺だ」
言って、一際巨漢が腰を上げた。圭介を悠然と見下ろして、ゆっくりと言葉を続ける。
「駒場利徳だ。一帯のチンピラは俺がシメてる。何の用件だ」
「俺のバイク直してくれないか」

なにもひねらず、圭介は用件を口にした。駒場利徳は眉をひそめて腕を組む。
「本当は自分でやりたいとこだが、生憎時間がない。頼む」
「期日は？」
「今日含めて2日。滞在ビザがそれしか取れんでな」
「ブツは？」
「おもて」
駒場利徳は舎弟らしい不良に目配せした。舎弟は一目散に窓辺まで走り、首を突っ込んで外を見下ろす。
「ゴミしかねっす」
「だそうだ」
「持ち主の俺が言うのもなんだが、確かにゴミだな」
圭介は苦笑を浮かべ――ふいにそれは、柔らかな微笑に変わっていった。
遠い昔のことを話しているようだった。
刻一刻とあの日の暴風に巻かれていく記憶の砂塵。けれどもあの想いだけは決して色あせない。
あの濃密な時間が、夢と誇りを魂に刻みつけているのだ――。
「先代から譲ってもらったモンでね。俺が峠の風になるまで捨てちゃいけねーんだとよ」
今回は風は風でも爆風である。
豪快ながら妥協を許さない先代のことだ。会うが一番、圭介から事の顛末を聞き出すだろう。
想像してみる――。
――よう圭。それでどうした？
――喧嘩した拍子に爆発したっす。はい。
――はっはっはっ！　……少し、頭冷やそうか。
……これ以上は無理だ。
恐怖する。骨身が凍りつく思いだった。
超能力者を出し抜いて殴り倒す圭介をして、先代は化け物・鬼・

悪魔と形容して然るべき人物だった。
勝つには相応の覚悟をしなければならない。腕が千切れるか目を抉られるか。死ぬ一歩手前まで追い詰められることだけは間違いない。
「しかしお前はゴミだと言う」
駒場利徳は抑揚なく事実を確認する。
甚だしく厳しい現実に、圭介はムスッとした表情で首を縦に振った。
「ゴミをバイクに、2日で直せとも言う」
「無理なのかよ学園都市様でもよぅ」
「可能だ。ただし相応の設備と金と労力が要る。それだけの価値がお前にあるのか？」
駒場利徳はじっと圭介を見据えている。
圭介はその意味を察していた。
――試している。見極めようとしている。
この伊吹圭介を、値踏みしているのだ。
圭介は強く笑った。口端を吊り上げ、歯牙を光らせる。
胸を張ってふんぞり返り、左手の親指を立てて自分に突き刺した。
「真っ当な手段で稼いだ金が７０万、加えて俺の命１日分」
「命？」
「１日、あんたたちのために体を張ってやる。言われりゃ世紀末覇王だってぶっ潰すし、財宝だってかき集める。ただし１日だ」
淀みない目をまっすぐ返した。ガンの飛ばし合い――と言うにはいささか敵意や攻撃性といった“悪意”がなりを潜めているものの、しかし好意的な見つめ合いのそれとはまったく性質が違う。
駒場も圭介も、決して視線は逸らさない。
「抜かすな、お前。いい自信だ。名前は」
「伊吹圭介」
言い放つも、しかし周囲の反応は薄い。けっ、と圭介は悪態をついた。学園都市という閉鎖空間では外の情報は入りにくいのかもし

れないが。
だとしても面白くない。外の不良に言えば「北陸最強の雷衝＜ライトニングスマッシュ＞3代目総長」として逃げていくものだ。もっとも、口走る“伝説”はたいてい尾びれが付いているものなのだが。
駒場は微動だにしない。なにも漏らさず、まったく動じず、ただ圭介をにらみ続ける。
言葉をいくつか交わしたにもかかわらず、場の緊迫感が一向に変わらない。異様な空気だった。
ざわめいていた取り巻きが次第に言葉数を減らしていった。圭介と駒場はいつしか手をだらんと下ろしたまま、互いに睨み合い続け――
ふいに、駒場が動いた。
巨体に似合わぬ細やかな足運びからスタンスを取り――途端、右拳が圭介の顔面に迫る。
速すぎる。
避けられない――ッ？
硬い拳が圭介の眉間を捉えた。勢いそのままに拳は振り切られる。
圭介の体は軽くのけ反り、背後に大きく吹き飛んだ。数メートルを滑空し――しかし倒れず、踏みとどまった。
咄嗟のバックステップが上手く威力を緩和してくれたのだ。――もっとも、軽く頭がグラグラするのは致し方ない。まともに食らえば、首から上がなくなっていてもおかしくなかったかもしれないのどの威力なのだ。
驚愕する駒場の隙をついて、圭介は体勢を立て直した。肺に思い切り空気を取り込み、拳を固めた。
――駒場の身体能力は異常だ。
素で壁走りを敢行できる圭介をして、そう思わせるほどに。
その異常能力が何かしらのドーピングか機械に頼っているのかは知ったことではない。

昨晩相手にした異能者とは根本的に違う部分がある。
駒場の能力は強い者を相手にするためのものだ。一瞬だが、挙動から圭介にはそれが感じ取れた。
手の内を晒さない。油断をしない。そして相手の挙動に対して神経質だ。
異能者犇めく学園都市で戦うために付いた癖だろう。弱者が強者を制すための癖。生き残るための戦略。
圭介は内心で肩をすくめた。圭介の喧嘩殺法の要は卓越した見切りと身体能力だ。
インファイト勝負は願ってもないが、技術はどうとして、身体能力はおそらく凌駕されている。先の動きはほぼ見えなかった。
――集中しろ。
圭介は呼吸の線を細めていく。
見切れなければ。でなくては勝てない。
見切る。勝つ――奥歯を噛み締め、体を低く沈ませた。
「終いだ」
急に駒場は拳を解いた。目に見えて戦意がしぼんでいく。
圭介は一応、数秒構えを解かずに注意深く様子を窺い――本当に戦う気がないことを確信した。
拳を下ろし、圭介は大きくため息をついた。
「勝手に始めて勝手に終わりってな。なんつーか。こうムカムカするぜ」
「非礼は詫びる。だが依頼に足る力量だ」
ジャケットの乱れを直すように裾をはたき、駒場は圭介に改めて目を向けた。
圭介もこれで、駒場と同じく血の気の多い不良を束ねていた男である。仕掛けてきた理由が単なる力試しだけでないことは察しがついた。
見ず知らずを何の理由もなく迎え入れることに反発する人間は少なくない。示しがつかないためだ。

だから、チームをまとめる頭はけじめをつけなければならない。
それは面接だったり課題だったり――チームによってまちまちだ。
どうやら――圭介は額に手をあてる。血が少しにじみ出ている――今回の場合は“ゲンコ一発”のようだ。
「では、バイク修理を請け負うに代わり、仕事を頼みたい」
かくして駒場は口火を切り――。
伊吹圭介の学園都市2日目が始まった。

次の日・朝　［10；00］　「悪い。借りと貸しのある顔は覚えてるんだけど

――劇的な体験が続いていたのでつい忘れていた。
圭介はスキルアウトから貰った消費期限切れの弁当をつついて失ったエネルギーを補充して疲労感を吹き飛ばし、ふとそのことを思い出した。
ここは学園都市。学校と勉強の街。ならば当然な話である。
昼間の街には人が極端に少ないのだ。なるほど確かに、これでは血の気の多い不良学生もすぐ目について補導されてしまう。
駒場利徳の依頼の意味が少しずつ、圭介にも理解できてきた。
「んじゃ、俺はここで」
補導されちゃかなわねーからな、とここまで案内してきた浜面が足を止めた。
圭介は振り返り、割り箸を握った手を軽く振ってみせる。
「俺のバイク、よろしく！」
「うっせぇ。あんたこそ俺らの財布取り返して来い」
「任せろ。豪華客船に乗ったつもりでいるんだな」
「……氷山にぶつかる奴じゃないだろうな？」
「は？　船って山にぶつかるのか？」
「駄目だこいつ」
浜面は深くため息をついて踵を返した。振り返りもしないその背中は――なぜだか少し、煤けてみえた。
あいつもあれで苦労してんのな、と勝手に結論付けて、圭介は弁当に残った漬け物を口に運んだ。歯ごたえのある食感を楽しみつつ、視線を伸ばす。
駒場利徳が圭介に課した仕事――あるいは依頼は、至極簡潔なものだった。
ある男を見つけ出してボコボコにしろ。完膚なきまでに――。
一通りの事のあらましも聞いている。　なんでも最近、駒場のチ

ームの人間が財布を盗まれているらしい。スキルアウトと呼ばれる彼らは異能を持たず、真っ当な学生生活を送っていないので警備員や風紀委員を頼るわけにもいかない。
上手く出し抜かれてカモにされているのだ。このままでは喧嘩っ早い不良達が見境なしに一般学生を殴り倒しかねない。
要は、緊迫した現状を打破したい、ということだ。そのためには、昼夜問わずに行動できる圭介は都合のいい人材なのだという。
もちろん駒場も1日で圭介が犯人を見つけられるとは考えていない。
ただ、自分達の捜査と別の切り口から情報を集めることで、事態が変化するのではないかと考えているようで――。
とにかく犯人を今日1日で挙げられれば最強、とだけ圭介は理解していた（“最強”はどうとして、その判断はひとまず間違っていない）。
喧嘩の時の神懸かり的な見切りと直感さえ生かせれば瞬殺だ。しかしそれらは、勘や運頼みに過ぎない。
おまけにこれで、圭介はくじ運が悪い。分の悪い賭けが嫌いでないことも理由のひとつであるが、人を直に相手取らなければ勘も相当鈍くなってしまうのも原因の一つのようだ。
見つけられない。勘だけでは。それは理解していた。
然るに圭介の取れる手段は、ただひとつに絞られていた。
“足で稼ぐ”。古風だが堅実な方法のはずだ。
元々の“ロボット討伐”の仕事もあるのだ。聞き込み自体は強いられていたことであるし、併せての情報集めはそう苦でもないだろう。
――やることは決まった。
最寄りのゴミ箱に弁当容器を投げ捨てて、圭介は無造作に口を拭った。
ひとまず向かうのは――そう、ＡＴＭだ。

＊　＊　＊

学園都市。学校と勉強の街。学生の街。
学生が金を手に入れて、やることはなんだろうか――？
ＡＴＭから引き出したおかげで重くなった財布をポケットの存在感を意識して、圭介なりに頭を働かせる。
――まず服だ。こうボロでは目立ってしまう。
次にバイクだ。メカは男のロマンである。
ビデオはどうだ。この間のタイトルマッチは見ていて体中の血液が湧き上がるようだった。
雑誌もいい。絵付きの技の解説は映像に劣るが勉強になる。
遊ぶ金にも消える。ゲームセンターのフライトシミュレーションゲームは目が回りそうなほどリアルだ。敵機とのドッグファイトは平衡感覚を失いかねない臨場感に熱くなる。
残るは食事だ。グルメ探求に終わりはない。
――などの独自の理論を展開し、金を手に入れた圭介は意気揚々と開店直後のショッピングモールへと遊びに――もとい、捜査に繰り出した。

＊　＊　＊

服屋で店員を呼び止めて聞き込み、新しいレザージャケットを三割引きに値下げさせ、モーターショップではディーラーと熱心に秋

モデルに搭載されるエンジンのデリケートさについて語り合い、ビデオショップでは難解なサスペンス映画を熱っぽく勧めるカウンターのバイトから逃げ出して――。

――いかん。これはいかん。

さすがの圭介も雑念を払いのけようと頭を軽く振って、目の前の雑誌に手を伸ばす――このままでは全ての店を1日で回りきれない。

流し読んだ“週刊男のミリオネア”を棚に戻し、今度は“ウィークリーガンマー”を開いてみる。

目次に“ドラマ的世代交代……ワールドタイトル争奪戦線徹底解剖”と見つけ、巻頭記事に注目する。

その瞬間――というにはいささか語弊がある。今日はこの以前にも数度、この“瞬間”に出会っている。

悪寒だ。冷たく、しかし陰湿な感覚はない。明確な殺意のにおいとはまた違う。武器を構えていないようだ。

雑誌から目を離し、遥か向こうを注視する。

向かいのビルの端――ギリギリ覗くことができる位置。目を細め、逆光に隠されたガラスの奥を透かし見る。

不意に、肩を叩かれた。

雑誌を閉じて振り返る。途端に顔を無造作にハタキで叩かれた。

「立ち読みはご遠慮願えますか」

「……さーせん」

潔く謝って、圭介は閉じた雑誌を精算して店を出る。脇に雑誌を抱え、向かいのビルを見上げた。

――さて、どうしよう。

ひとまず近場のゲームセンターを探し、歩道に沿って歩いていく。思いのほか隣の車道には乗用車が走っていた。

技術漏洩を防ぐため学園都市内に一通りのプラントを揃えているせいだろう。学生が多いのはもちろんだが、決してそれ以外の一般人が住んでいない訳ではないのだ。

バイクさえあればすぐに移動できるんだが――ぼやいてようやく、

圭介はバイク修理の交換条件にいて思い出した。とはいえ、やることは変わらないのだが。
何気なく視界を広げ、傍から見れば機嫌悪く周囲にガンを飛ばしながらゲームセンターを探す――ものの、圭介の目はどこか虚ろでいた。心ここにあらず、といった風体だ。
バイクに乗りたい。すっきりしない気分が晴れてくれるような気がしたのだ。
面白くない。なかなか刺激的な体験が続くものだからついつい忘れがちになるのだが、面白くないことも少なくない。昨晩の倉庫の喧嘩も、今朝のじゃれあいもだ。
拳を振り回すのは大好きなはずなのに、ここに来てからは随分と面白くない。わけのわからない理屈をゴネられたり、不完全燃焼に止められたり。
やはり好き好んで学校と勉強の街に来るようなインテリの考えはわからん――。
嘆息して、圭介はふと視線を留めた。近付いてくる。人だ。
長髪を後ろでまとめた女で、どうやら年上。動きやすそうなジャージで身を固めている。
立ち振る舞いから、相応に“できる”部類の人間だろうと直感する。
「ちょっといいじゃん？」
「あー？　すげーじゃん」――胸が、とは敢えて言わない。
「はぁ？　……とにかくここでなにしてるじゃん」
「ぶらついてるんすけど」
「学校は？」
「あんなもんに喜んで行くナリに見えるかよ」
一瞬、圭介の脳裏を映像がよぎった。
――おぞましい記憶だ。
箱詰めの世界の思い出。黒い板に難解な文字がズラズラ並び、それは手元の本にまで及んで脳髄を破壊せんと五感に襲いかかっ――。

「あんなトコ行くかぁぁ！」
――つい、語尾に力がこもってしまった。
「ほほぅ。剛毅じゃん」ジャージ女は眉をひそめた。「ちょっと向こうまで来てもらうじゃん。みっちり指導してやんじゃん？」
「しっ……シドー？」
しどう。死道……っ！？
まさかこの女、特殊な拳法か暗殺術の使い手なのか？　またよくわからん理由で喧嘩ふっかけられているのか？
思わず体に力が入り、身構えて拳なぞを握ってしまう。臨戦態勢。ジャージ女は口端を上げた。
「やる気じゃん？　まぁ、私はそういう威勢いいの、嫌いじゃないけどね」
「けっ」
死なば諸共。毒を食らわば皿まで。オーバーヒートまでアクセル全開。
今更どうこうできない状況だ。どうせ倒してもまたイヤな気分になるのだろうが、背に腹は変えられない。
せめて、スッキリしてからイヤな気分になってやる。
意を決する。圭介は足で歩道にすり合わせ、未だに雑誌を脇に置いたまま、固めた左拳を上げる。
ジャージ女は身を屈めた。特有の緊迫感が周囲に広がり――。
「あっ、おにーちゃーん！」
――ふいに圭介の腕が絡み取られた。
「すみません。おにいちゃんってば口下手で。私たち、転校の下見に来たんです。でもおにいちゃん、学校より街並みに興味があるって勝手に」
まさに殴り合おうとしていた瞬間に言葉をマシンガンのように乱れ撃たれ、ジャージ女も圭介も、呆然と目を丸くした。
否、圭介が呆けた理由はジャージ女とは少し違っていた。
見覚えがあったのだ。彼女の銀色の髪に。

「ほら、いくよおにいちゃん？」
質問を投げる前に左腕を引っ張り――明らかに体格の勝る圭介を文字通り引きずるほどの力で――ジャージ女の手から抜き出した。
虚を衝かれたためか興が殺がれたのか、ジャージ女は追ってこない。だがそれでも、圭介の腕を引くことを止めない。
「なんのつもりだ」
「意味が不明瞭なため返答できません」
機械的に、丁寧で聞き取りやすく抑揚のない声が返ってきた。
一連の流れを体感しておいてなんだが――喋れるのか、こいつ。
「あんた、俺をどこに連れて行く気なんだ？」
「目的地を指定してください。お連れします」
「あー？　ならゲーセンとか」
「ゲームセンターという認識でよろしいでしょうか？」
「お、おう」
「了解しました。検索します。検索完了しました」
「早っ！　凄ーなあんた」
「こちらです」
ぐい、とまた尋常ならざる力で引っ張られた。無駄に抵抗すれば片腕を持って行かれると直感し、大人しくこれに従った。
迷いのない誘導に足向きを任せ、圭介はじっと腕に抱きつく銀髪を観察した。
落ち着いた碧い瞳に白い肌。それらは一見して欧州貴族の令嬢を思わせた。
しかし優美な四肢を隠すのは平々凡々なセーラー服で、耳元には正にプロ用といった風のヘッドホンらしきものをはめている。
なにより長身の部類に入る圭介を悠然と連れ歩く立ち振る舞いは非常にパワフルである。これでは中学女子格闘家の印象を与えかねない。
もちろん、圭介はこの銀髪がそんな規格に収まりきる戦闘能力でないことを知っていた。

なにせこれは、圭介に巻きつくこの腕を無骨なガトリングに変形し、情け容赦なく冷酷に命を穫りに来るメタルヒットマンなのだ。ターミネーターと言ってもいい。
今の圭介なら、“そいつは未来からお前を殺しに来た殺人ロボットだ”と言われたらその瞬間に信じただろう。
「おい」
無反応。
今更ながら――まさかこいつ、人気のない所に連れて行ってゼロ距離から蜂の巣にする気じゃ――絶望感が圭介に襲いかかった。
腕を捨てる覚悟で逃げるにしても、土地勘がないこの学園都市では逃げ切れない。
片腕では昨日のように迎撃も十分にできないかもしれない。
結局、従うと決めてしまったのだ。最後まで従うしかない。
せいぜい祈るか、と圭介は深くため息をついた。
「あっ……と。たしか、けいすけさん？」
ふいに呼ばれて、圭介は半目を向けた。また見覚えのある花畑である。
いよいよ年貢の納め時か、と少しだけ考える。もちろん、それは決して肯定できるものではないのが。
「っおおー……？　昨日の花の子」
圭介は足を止める。花畑を頭に飾り付けたセーラー服の女の子が手を振っていた。隣にも髪の長い、同じセーラー服の女の子が付いている。ほどほど今日はセーラー服に縁があるようだ。
「はい、昨日は……って、花の子って意味ですかぁ！？」
「悪い。借りと貸しのある顔は覚えてるんだけどよ。名前はイマイチでさ」
頬を紅潮させて頭を押さえた花の子に、圭介は素直に詫びを入れた。
花の子は不満げに圭介を見据えたが、すぐに「まぁいいですよ」と話題を切り上げた。その意を汲んで、圭介も違う話を振る。

「さっきサツでもないのに職質されたんだが、もう下校なのか？」
「あー、大覇聖祭前ですからね。少しいつもより警備が厳重になっているんだと思います。学生は準備もあるので、私たちの学校は早めに終わりになりました」
「午前だけか……そういや、昼間に帰るのってテンション上がったもんだっけ。いや懐かしい」
「そうですよね。それ、私もわかります」
子供っぽく笑う圭介に花の子のお供は、ずい、と身を前にして賛同した。長い髪が揺れ、肩を抜けて地面に垂れる。
「去年なんか、弟と一緒に下校しました。どういうわけか、帰る前にお弁当持たされて」
「おおーっ。話せるな嬢ちゃん。あんたも花の子とまとめて奢ってやろう」
「いいんですか？」
「何度も聞くなら奢んねーぜ」
「ところで」
花の子がひょっと背伸びして、圭介の体の影に視線を向けた。
いつの間にか隠れていたようだ。普段周囲の気配で行動を判別する癖がある圭介には、どうも動向を掴みにくい。
「そちらの女の子はどなたですか？」
「ああ、こい――」
体の影に自らも目を向けた瞬間、腕が常軌を逸した圧迫感に襲われた。
肉を貫く一歩手前で硬直する鋼鉄の指。押しつけられた妖美なボディ。伝わる人並みの体温が逆に恐怖を刻み込む。
これは警告だ。バカな圭介にもわかりやすい肉体言語。
口をしっかりと閉ざして最善の一手を探し求めるも、やはり見つからずにただただ嫌な汗を垂れ流した。
「もぉ、にぃにったら。はずかしがっちゃってぇ～」
こいつなんか呼び方変えやがったマジ意味わかんねーぞ、と言う

ツッコミを呑み込みざるを得なかった。下手を打てばギャラリーの前で片腕四散というグロテスクな絵を見せつけかねない。

「私、このとおりにぃにの妹。ニルフていいます。よろしくね」

――どう見たら妹なのか誰か教えてくれ。

ニルフと名乗った自称妹は甘ったるい声で鳴いて、ふわふわした銀髪を圭介に擦り付かせた。甘い香りが鼻につく。昔嗅いだ覚えのある匂いだ。

花の子はニルフの自己紹介に笑顔で応え、お供の嬢ちゃんは意外そうに首を傾げつつも花の子に倣う。

明るく可憐な彼女達の振る舞いをよそに、圭介はさり気なく頬の冷や汗を拭った。

――これで身の安全が保障されていれば、最高なのにな。これ。

圭介の意を理解できる人間は、残念なことにその場にはいなかった。

次の日・昼　［12：30］　「よくわかったな。マブダチのセリフだ。イカ

「おふたりは本当に仲がいいんですね」
んなわけねーだろ、と返しかけた圭介の左腕が低く軋んだ。明確な敵意を傍にしていることを思い出し、反射的に口つぐむ。
「兄弟で仲がいいなんて羨ましいな。ウチはしょっちゅう喧嘩してましたよ」
「だって私、にぃにのことが大好きだもん。ね？」
鉄腕を念入りに圭介に絡みつけ、ロボ子改めニルフはごく自然な笑顔を浮かべた。――どの口でそれを言うんだ、こいつは。
泣きたい気分になって、圭介は気付かれないように嘆息した。
小一時間この調子である。その理由は、バカな圭介にもなんとなく理解できていた。
より自然に圭介を拘束するためだ。ニルフにとって“人がベタベタしていて自然な間柄”というのが、これなのだろう。もっとも、それが本当に正しい世論なのかはわからない。
ただ初春と佐天さんの若干引き気味の反応を伺う限り、あまり安牌とは言えないようだ。
とにかくこの小一時間、べったりなのである。それだけならまだしも、時々ホールドを強めて痛み付けプレッシャーをかけてくるものだからたまったものではない。
数十時間ぶりの消費期限の切れていないまともな食事のはずだが、なかなか喉を通りにくい。防衛衝動が異物の受け入れを拒否しているのだ。圭介の意思とは関係なく。
指先を細やかに操り、フォークの先にスパゲティを絡めた。
昨日の喧嘩で削られた体力の回復のためにも食べるべきで、朝食の粗末な弁当だけではとても足りず、実際空腹なのにも関わらず。
――ああ、ちくしょう。
試しに思い切りぶん殴ったら動くの止まんねーかな、と悪態混じ

りでニルフを見やった。鉄の笑顔が返ってくる。人のそれと寸分違わぬ可憐な表情だ。
――見ていると圭介の反骨精神に火がついた。
「伊吹さん、あまり食べませんね。食欲ないんですか？」
佐天さんに首を傾げられて圭介は生返事を返し、フォークをニルフの口元に運んだ。
ニルフの笑顔がふっと消える。意外そうにきょとんと目を丸める。傍から見れば、そんなところだろう。
人間らしい、それも女の子らしい可愛げのある自然な仕草だ。
「やだ。にぃに、食べさせてくれるの？　あーん」
食べれんの、と問いかける隙を与えない。口を広げ、そのままフォークにかぶりついてきた。
（フォークごと食わないよな、こいつ）
懸念もつかの間、フォークはニルフの口からつるんと抜けた。フォークには傷ひとつ無い。
ほくほくと頬を膨らませ、満足そうに顔を緩めている。
「……うまいのか？」
「もぐもぐ――んむ。ミートスパゲティは私の大好物だってにぃにも知ってるでしょ？　もう。恥ずかしがって。かわいっ」
（いや知らねーから）
声には出さず圭介はまた淡々と丁寧に、かつ念入りにスパゲティをフォークへ絡めた。
相手はロボットだ。気のせいだとは思うが――“自然に食べる”間、圭介にかかる重圧が表情と一緒に緩和される……ような気がしたのだ。
フォークを差し出されると、つられてニルフは口に含んだ。スパゲティをつるりと抜き出し、実に美味しそうに食べてみせる。
もしかしたらこれは、ある意味で“負け”になるのかもしれないが――極めて、非常に、爆裂にかわいい。思わず圭介の口元も緩んでしまう。

「……にぃひ、ちょっほ、ほろほろ、ほほすき」
「い、伊吹さん？　妹さん嫌がってますよ」
「……だよな。クソ」
「うわぁ……」
本気で悪態をついた圭介を見やり、佐天さんは乾いた笑いを浮かべた。半分以上を平らげたフルーツパフェの生クリームを掬い――少し考える素振りを見せてからニルフに差し出す。
「こっ、こっちも食べる？」
「佐天さんまで……」
呆れたように肩をすくめる初春に、佐天さんはあっけからんと「だってかわいいから」と笑ってみせる。
ニルフはよく噛んでスパゲティを飲み込んでから、佐天さんの差し出したパフェを口に入れた。
「うっわ～食べましたよ！　なんかこう、グッと来るものが……」
「クソッ！　俺のスパゲティは食えないってのか！　ナポリタンだからかそうなのか！？」
「ふたりとも、その、ここファミレスで、他の人もいますから、落ち着いてください……」
初春に宥められ、圭介と佐天さんは平静を取り戻した。
そして圭介は都合よく、初期に向けられていた敵愾心をきれいさっぱり忘れ去っていた。残ったスパゲティを瞬く間に胃袋へとぶち込み、頬杖をついてむくれてみせる。
「そういえば妹さんはなにも頼んでませんね。どうしてです？」
「あー、そりゃあ」
投げやりに答えかけた瞬間、圭介の左腕が尋常ならざる力に極められた。油断していた圭介は思わず飛び跳ね――るのを、どうにかこらえた。
「私ダイエット中なの」
暴力的な手段で圭介を封殺した割に、可愛げのある理由で返答した。

続く「え～そんな太ってないじゃん」から始まる一連のガールズトークを軽く無視し、圭介は一心不乱に冷水を飲み続けた。
疎外感云々以前に、単なる保身が目的である。次に失言すれば今度こそ骨を粉砕されかねない。復活した危機感と緊張感が圭介にそう告げていた。
死んだ魚のような目に戻って周囲に見渡し――ふと、圭介はあることを思いついた。身を寄せているニルフに耳打ちする。
「ちょっとトイレ行きてーんだけど」
「拒否します」
声のトーンを落としてニルフが返答した。表情は気力的で柔らかいものであるのに反し、冷たい声質である。
「ちなみにこの店は男女別だ」
「既知です」
「ならどうする」
「拒否します」
「これ以上人の目引く気か。ロックだな」
「ロック……ですか？」
圭介にしてみればただの軽口だったのだが、予想外にもニルフは笑顔を僅かに歪めた――ように見えた。
「もー。わかったわよ」
途端にニルフは圭介の腕を解放した。ちょんと小突いて圭介を促し、朗らかな笑顔を振りまいた。
――それは、世界中の男共を恋に落とすかのような、とても魅力的な笑顔だった。
「はやく、もどってきてね？」

＊　＊　＊

洗面台に顔を突っ込み、水道水で頭を冷やす。
僅かだが、ニルフから離れられた尊い機会なのだ。無碍にはしない。可能な限り緊張の糸を緩めなければ――。
「おい長ェぞどけ」
呼ばれて、圭介は洗面台からノロノロと頭を引いた。怪訝な顔で声を見やる。
普通の男だ。目つきの悪い茶髪の男。しかしそれ以外に取り留めて特徴らしい特徴も見当たらない。
だが前にしていると、どことなく“異質感”が鼻につく。言い換えれば“存在感”や“求心力”とも取れるだろう。
「あー、悪いな。ちょっと気合い入れ直してたんだ」
金色の蛇口を閉じて水を止め、圭介は素直に頭を下げた。
謝罪のセリフを怪訝に思ったのか、男は「はぁあ？」と不機嫌そうに顔をしかめる。その仕草は、圭介の知る“喧嘩の売り方”によく似ていた。
「まぁ、文句はねーよ。我慢比べも戦いだ。もっとも今のは誇りの賭け甲斐もないし、ゲンコの方がシンプルで好きだけどな」
「誇りだぁ？　なに言ってんだお前」
男は嘲りを含んだように物を言う。
圭介にとっては懐かしさすら覚えるその立ち振る舞いに、思わず微笑すら漏れてしまう。
「ロクに拳も握ったことのないガリ勉にゃ、わかんねーかな」
「んだと？」
「頭良さそうだからな。できないと思ったら血ィ吐いてでもやり遂げる！　……なんて、思わんだろうよ」
「ったりまえだ面倒くせェ」
「けどよ。退けないんだ、誇りを持つとな。たとえ無理でも逃げられない。自分の世界を守るために、ゴールしなけりゃ終われない」

「くだらねぇ。馬鹿で阿呆で世の中を知らず融通の利かないガキの生き方だ。努力や希望なんてものを未だに信じてるのか？」
男が吐き捨てた。圭介を見返す切れ目から、侮蔑の色を嗅ぎ分けた。
――くだらない。そうだろう。言った圭介もまた内心で賛同した。人は小さい。だからその人間の世界も小さい。共通項がなければ、ほかの世界など簡単に理解できないものだ。
現に、圭介にしてみれば進級や成績のために必死になっている学生の世界観はよくわからない。
重要なのは、世界を愛すること、誇りを持つこと――そしておそらく、理解するよう、理解されるよう努めることだ。
「……信じてないのか？」
「愚問だな」
「でも面白い。それに、無理って思ってたのにできたら凄いだろ？」
にしし、と男の嫌う子供のような笑い方で圭介は口端を歪めて牙を光らせた。
男は一瞬苦々しく顔をゆがめ、それを吹き飛ばすかのよう失笑を漏らした。
「非論理的だな、ガキの理論だ」
「あんたの頭は理論だけで動くのかよ。メカか？　装置か？　ロボット様か？」
「……その方が楽だ。賢い生き方のはずだ」
「――“魂のまま歩め。それは正しいお前の道だ”」
言った圭介自身、少し驚いていた。
やや哲学的この言葉は、当然ながら圭介のものではない。昔、友人――親友と形容して然るべき彼から贈られたものである。
小難しい彼の言葉を意味まできちんと心にとどめられていたのは、上等な頭を持たない圭介にしてはひどく珍しい。
そのせいか、あの時代のことは未だ風のにおいまで圭介の魂に刻まれているのと自負しているが、彼の言葉はあまりよく覚えていな

い。
――逆に。
こうまでよく覚えているということは、それだけ今の基幹となっている――ということだろう。
「誰の台詞だ」
「よくわかったな。マブダチのセリフだ。イカスだろ」
「言ってそんな気の抜けた間抜け顔を晒されりゃあ、誰だってわかる。誰だってな」
「そうなのか」
「そうだ。気づけ馬鹿が」
ははぁ――生返事を呟き、圭介は間抜けと揶揄された自分の顔を手で触れた。
頬は少しばかりザラザラした。弾力は弱い。あまり肉付きはよくないかもしれない。
「だが……なるほどな。面白ェ」
「へ？」
「魂のまま、か。悪くない。いい言葉だと思うぜ」
「――だろ？」
また子供のように強く笑う圭介に、男もまた微笑を返した。
それは端から見れば人を小馬鹿にしたような笑い方だったが――屈託のないものだと直感が告げていた。
自然と圭介は右手を広げ、男に差し伸べていた。
「伊吹圭介だ。ここには明日まで滞在してる。ここも……えっと、運動会？　で忙しいらしいが、時間があったらまた会おう」
「ああ。悪くない」
男は圭介に応じ、右手を握り返した。
「俺は――

＊　＊　＊

――い、伊吹さん？」
目の前が真っ暗になった。舌先には砂利の触感。アスファルトの冷たさが肌を刺す。膝が痛む。頭もだ。
――どうしてこうなった？
記憶を辿る――辿れども、わからない。
なぜ、自分は街中で倒れているんだ――？
「そ、その……立てますか？」
「ああ……」
気の抜けた声が出た。
ノロノロと上体を起こす。抵抗感はない。痛みもとりとめて強いものはない。
――それだけに衝撃だった。
例えるなら、エンジンの整備中にボルトが１本見つからない時の感覚。問題なく始動するが、堪らなく不安を掻き立てられる。
呆けている圭介を見かねてか、右手がすっと差し出された。昨日あった覚えがある。ツンツンした太陽頭の少年だ。
「――とうま、だったか。卵、旨かったか？」
「それが……不幸なことに昨日のガス爆発でコンロは役立たず、電気も止まって冷蔵庫もおしゃかでして。生卵のまま、かつ腐る前に食べなきゃならない事態になっちまいましてね……」
ガス爆発。
反芻する。ガス。爆発――。
昨日の顛末がフラッシュバックする。
爆発。漏電。炎上。吹き飛ぶバイク。散りゆく倉庫。燃え尽きる積み荷。飛び散る火の粉。出来上がるホップコーン――。
（あれのせい……か？）

ずん、とまた一段階圭介の気は重くなった。
「代わりの食材買おうにも、どこも昨日の原因不明の倉庫爆発事故で品薄状態で。でも上条さん的には腐りかけのタンパク質があるだけ幸せなわけで。ははは……」
肩を落とす当麻を前に、謝罪の言葉すら圭介は呑み込んでしまった。下手に謝る以上に、彼には物資、すなわち食材が必要なのだ。
「泣くな。なんか奢ってや――」
言いかけて、はたりと気が付いた。
無い。財布。
愕然として、或いは納得した。
駒場から受けた依頼――“被害届の出せない不良を標的にしたスリ”を捕まえて欲しい――を思い出す。
例の“犯人”とやらにやられたのだ。
あろうことか、この伊吹圭介が。“虎殺し”の異名すら持つ圭介が。
右手に激痛が走る。無意識にアスファルトを殴りつけていた。昨日ニルフをどついて以来、壊れかけだというのに。
「伊吹さん？」
顔面が痙攣している当麻をキッパリと無視した。圭介は腹の底から呪詛を呟く。
拳を固く握りしめ、血走った目でひび割れた地面を睨みつけた。
「叩きのめす……ッ！」
「はて面妖な。だまし討ちはぬしらの得手じゃろう」
据わった視線を走らせた。
覚えのない白装束のフードから垣間見える淡い黄の毛並みは記憶に深く刻まれたものと相違ない艶やかさだ。
「てめっ、化け狐！　なんであんたがここにッ！」
「まことに面妖な。ぬしが立てる大地に、わっちが至れぬ訳がないであろう？」
袖で口元を隠し、上品そうに“化け狐”が笑った。

ゆらゆらと圭介は立ち上がる。和やかな“化け狐”の表情に流されぬよう目と鼻の距離で顔を合わせ、怒気の矛先を突き刺した。
「まさか、あんたが俺になんかしたんじゃねーだろうな。できんだろあんた。記憶消したり意識操ったり」
「ぬしの下賤な脳髄がひらめく程度のイメージは容易に具象化できるに決まっとろう。……が、知らんの」
「知らんだぁ？　喧嘩売ってんのかオイコラ泣かすぞワレコラ」
「ぬしに術をかけたことなどありはせん。それと、口調が現役に戻っとる」
「あ、あのー……？」
“化け狐”に向けていた視線をそのまま走らせた。殺意にも似た激情に貫かれ、当麻の顔が蒼白に抜ける。
「んだよ、あぁ？　あんたがやったんか？　んなにユメが見てーか、ゴルァああッ！！」
「違う！　違います！　違うんです！　断じて！　でもそっちの女の人はさっきまで俺と一緒にいたんですマジで！」
「……ちっ」
悪態をついて、圭介は目を伏せた。今の状態では、目を合わせれば意図せず威圧してしまう。
――そう、わかっていたことだ。
この“化け狐”は決して嘘をつかない。嘘をついて喜ぶような感情は持ち合わせていない。
長い年月をかけて、この狐の全ては熟成し腐敗すら始めているのだ。知識に然り。力に然り。その魂に然り。
「ではどうする小僧。泣き寝入りかぇ？」
「ざけんな狐。寝言言うにはオメメパッチリじゃねーか。どつきゃ治るか？」
「変わりないのぅ、小僧」
薄笑いを浮かべる“化け狐”は圭介の頭へと手を伸ばし無遠慮に撫でまわ――

「やめろコラ」
――寸前で、圭介は悪態とともにすぱんとはたき落とした。
鼻を鳴らし、しかし内心の闘争心は抑えきれず獰猛に笑った。天を高く見上げ、拳を強く握り締め。
「いくぞ待ってろクソやらぁあああああああああああああああっ！！」
腹の底から、高らかに声を張り上げた。
――それは、宣戦布告と呼ぶには相手の輪郭が酷く不鮮明で、意識表明と言うには言葉が圧倒的に欠如している。ただの感情を乗せた雄叫びだ。
しかしながらその意は正しくその場を満たし、包み込んでいた。圭介の存在、あるいは世界、あるいは魂に染め上げられたのだ。
その圧巻の野性と闘争心の奔流を前に上条当麻は乾いた笑いを漏らし、“化け狐”は相も変わらず微笑んでいた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0596z/

魔不良冒険奇行　～怪傑！　超電磁砲編～

2011年12月15日03時48分発行